

北海道国際理解教育研究協議会 会報

第16号

会長 磯貝 登
事務局長 大泉 弘
発行 1990
12・10

第11回北海道国際理解教育研究大会 網走大会に参加して

北海道国際理解教育研究協議会

事務局長 大泉 弘
室蘭市立高砂小学校長

今年度の研究大会は去る11月2日3日の両日、オホーツクの地・網走市で開催された。当日は折り悪しく時雨の空模様と時を同じくして市長選の最中の研究大会であったが参加者数450名を超える熱気溢れた大会であった。

それぞれの会場の公開授業をはじめ、分科会、講演会等どれをとっても内容あるものであり、全国大会としても遜色のない質の高い研究大会であった。それだけに鎌田実行委員長をはじめ実行委員の方々のご苦勞は測り知れないものがあり、改めて皆様方に敬意と感謝を申し上げます。

そして、何よりも心強く感じたことは、網走教育局をはじめ網走市理事者、市教育委員会、そして管内教育委員会の絶大なる援助に支えられての本大会であり、併せて心より感謝申し上げます。

上記のようにどの公開授業もそれぞれのねらいに基づく創意工夫が随所に見られ、参観者に大きな感銘を与えた授業であった。そして、その授業を通し日々の取り組みの様子を知ることができたのも大きな収穫であった。

特に中学校の英語科の公開授業では、参観していた外国人教師の飛び入りによる南半球のクリスマスの過ごし方の説明があるなど国際理解教育の授業ならではの様子であった。ただ、心残りだったことは、研究協議において、小中学校合同分科会が日程上の都合と小中学校合同ということもあり、討議の時間が確保されず地道な実践に対する意見交流の時間に不足していたということだった。しかし、それぞれの地でローカルマインドによる地道な取り組みや実践に学ことが多く、その実践にも敬意を表すると共に私供の会の果たす役割の大きさと責任の重さをひしひしと感じた今大会でありました。

大会主題

世界に目をひらく児童・生徒の育成

～学校と地域における国際理解教育をどうすすめるか～

I 研究の基調

1 国際社会への対応

わが国に於いて、戦後様々な変遷を経る中で工業を中心とする経済の発展は目覚ましく、今日の豊かな社会を築くに至っている。それに伴ない、政治・経済・文化・芸術・スポーツとあらゆる分野での国際交流、国際化が盛んになり、国際的地位が高まり、国際社会に貢献し、信頼される国際感覚豊かな国際人の育成が必要不可欠となっている。

わが国のこれまでの歴史的・地理的条件から、今まで、外国人との交流や接触の機会が少なかったため、外国人に対する見方、考え方、感じ方に偏りがあり、その文化、習慣、考え方も十分理解できず、それらの異文化を理解する前に、自国の文化・習慣との比較において判断・評価する傾向がある。

今日のように、物的にも、人的にも海外との交流が増大しているにもかかわらず国際理解に対する一般の認識は、いまだ不十分であり、国際交流の場に於いても閉鎖的、排他的、独善的傾向が指摘されており、真の国際人の育成が求められている。

こうした、社会の要請に基づき、特に学校教育においては、国際理解教育の推進が求められており、望ましい国際親善や国際協調、国際理解の精神・態度の育成を図ることが急務とされている。

そのため、教育職員の共通理解のもとに小・中・高の発達段階に応じた国際理解教育のありかたを研究し、学校・地域の実態に即した意欲的な教育実践に取り組む必要がある。

国民一人ひとりが国際社会の一員としての自覚を高め、国際化・国際交流への対応に広く目を開き諸外国との相互理解や心からの交流を深めていくことが求められております。

2 大会主題の設定について

過去の大会の主題をみると、“世界に生きる日本の教育”（第7回）“たくましく世界に生きる子どもの育成”（第8・9回）“世界に通じる個性豊

かな児童・生徒の育成”（第10回）と、世界的な視野でものごとを見つめ、考え、行動出来る子どもの育成が主題として取り上げられて来ております。

本大会も、こうした流れを受け継ぎ広く世界に目を開き国際人としての自覚、基本的人権の尊重や、人間尊重の精神を基調として身につける子どもの育成を、学校と地域社会の連携のもとにどう取り組むかを網走地域の実践と関連付けて研究を深めるべく大会主題を「世界に目をひらく児童・生徒の育成」としたのである。

網走市は、カナダ・ポートアルバニー市との「姉妹都市提携」を結び、1986年、87年、89年と過去3度、小・中・高生徒のポートアルバニー市への訪問団を組織しております。また、1985年には、カナダ・メープルウッド小学校への訪問が網走小学校の児童23名によってなされるなど、国際交流実践都市として、その成果を上げております。さらにブラジル松柏学園とも積極的な交流を推進しております。

こうした地域の実践をベースに学校・地域ぐるみでの国際交流や国際理解教育の在り方を明らかにしていきたいと願っている。

3 研究の流れ

第7回全道大会までの歩みをみると、「海外派遣教師の会」が中心となり国際理解教育のあり方について研究を進めていたが、第8回旭川大会より、単に派遣教師にとどまらず、広く、国際理解教育に関心・理解を示す全ての方々に研究に参加をいただき、研究の輪を広げていこうと確認し合い、

- ・身近で日常誰でもが取り組める国際理解教育を。
- ・地域の特性を生かした国際理解教育を。
- ・授業実践を中心とした研究の交流を。
- ・地域の文化団体との協力を。

の四点を中心に今後の研究を進めていくこととした。

旭川大会では、「たくましく世界に生きる子どもの育成を目指して」身近な国際理解教育という視点と、初めて授業研究を重視した研究会の開催とした。

小学校の授業に於いては、道徳教育を、中校では特別活動を中心とした国際理解教育の研究を進め、人類愛を基調とした、理解と協調の大切さから課題解決を目指した。

第9回渡島大会に於ては、第8回大会の課題である、学校教育の中における国際理解教育の機能を、明らかにし、教育課程の中での位置付けや計画化を明らかにしていくことを受け、副主題として、～地域や学校の特徴を生かした国際理解教育～をかかげ授業研究を積み上げてきた。

特に、第9回大会では、地域の特徴……ということによって養護学校高等部の実践を公開し、小・中・高の一貫性を強調した大会であったことは特筆されることであろう。

記念すべき第10回札幌大会に於いては、「世界に通じる個性豊かな児童・生徒の育成」～いつでも、どこでもできる国際理解教育～のテーマのもとに、国際性豊かな子どもを育てる授業を展開している中では、日本の伝統文化を通しての心情面での国際化や、自己を見つめることが国際性豊かな児童を育てることになり、人間理解の原点として、人権尊重、人間尊重につながることを改めて認識し合った。

今年度の第11回大会では、単に学校内のみならず、地域ぐるみでの国際理解教育を押し進めることに研究の主眼をおき、小・中・高の一貫した国際理解教育の授業の取り組みを公開し、授業を通してそれらの課題解決に迫っていきたい。

II 国際理解教育「網走のあゆみ」

網走に国際理解教育研究会が発足したのは、1987年（S 62年）7月である。オホーツクの地に押し寄せる国際化の波は、姉妹都市の増加、小・中学生による諸外国との交流、海外日本人学校経験教師の増加及び長期・短期の欧米・東南アジアへの研修派遣等々となってあらわれるに至って国際理解教育研究の機運高まり、結成の運びとなったのである。

第1回総会に於いて、網走教育局指導主事 栗崎 勝秀先生の「国際理解教育に期待するもの」と題した記念講演をいただき、歴史的な誕生をたのである。

翌、1988年（S 63年）2月、実践交流会を開催、各校の実践を持ち寄ると同時に今後の研究のあり方として、授業実践を通じた研究を進めていくことを確認し、研究主題を第8回全道大会の主題である「たくましく世界に生きる子どもの育成を目指して」とした。

— H 元年2月、第1回網走管内国際理解教育研究大会 紋別大会を開催。

- 特設授業公開 「ジェフさんと遊ぼう」 小2年 特別活動
- 全体集会 「ジェフさんとの交流」 全校児童 特別活動
- 実践交流
 - ・国際理解教育のカリキュラムの編成 中林 栄一郎先生 (網小)
 - ・国際理解教育推進の方策 加藤 一大 先生 (網小)
 - ・国際理解教育を深める指導の工夫 大友 次男 先生 (渚小)
- 講演
「国際交流の体験を通して」 小林 俊氏 (紋別信金総務部次長)

— 1990年(平2年)2月、第2回網走管内国際理解教育研究大会 網走大会を開催。

- 特設授業公開 「ジョニーさんとの交流」 小4年 特別活動
- 実践交流・研究討議「交流学習をどう進めるか」
 - ・小学校に於ける国際交流の実践 間山 浩平先生(斜里三井小)
 - ・国際理解教育北中の実践と現状 伊藤 孝三先生(美幌北中)
 - ・高等学校パイロットスクール
研究計画 佐々木透可先生(網走南ヶ丘)
- 講演
「国際理解教育に於ける教師の役割はいかにあるべきか」
グラハム・ハート氏(北海学園北見女子短期大学 助教授)

以上のような内容の研究会を過去2回開催し、管内のいろいろな学校の実践、授業を通して国際理解教育とは、次の4つのことがらを根底に置いて進めていくべきものとの認識に立つことができた。

1. 人権尊重

ユネスコ憲章前文にあるように、国際理解は、基本的人権の尊重と分かちがたく結び付いている。従って、国際理解教育においては「人間の尊重平等・相互理解」という民主主義の原則に基づく人権教育が、その根底に存在すると同時に、それは、常に国際理解教育を貫く指導原理でなければ

ならない。4つの主眼点は、それぞれ重要であるが、それらは並列の位置にあるのではなく、人権尊重を基盤として、その上に他の3つが発展的に積みあげられていくべきものとする。

2. 自国文化の理解

わが国と諸外国の文化理解を深めて、国際人としての資質を備えた人間を育成することは、今日、極めて必要なこととなってきている。自国の文化を理解することは、単にそれを諸外国に紹介するために必要であるばかりでなく、相手の文化を正しく理解しようとする上での基盤としても不可欠な要素である。自国の文化は、その国民・民族にとってはかけがえのないものであって、その理解・継承は民族存続の根源である。自らの国・文化への誇りの上にこそ、他国他民族の異文化の尊重・理解も得られるのであるという認識を持つことが大切である。

3. 異文化の理解

地球上には数多くの国・民族が共存しており、それぞれが独自の生活・風習をもつ文化を有している。これらの多様な文化・価値観を理解し受容する相互尊重や寛容・共感などが国際協調の基盤となる。こうした視座はこれまでの日本の教育において欠けていたものであり、今後は重要視すべきことである。

故に、異文化の理解に当たっては、独善に陥ることなく、又優越意識や劣等意識を排して、あるがままに違いを受け止めながら、人類としての共通性を探っていくことこそ今日最も必要とされていることである。

4. 国際協調

今日の世界は、環境・食料・資源・エネルギー・平和・人権等数多くの重要な共通課題に直面している。

これらは、どれ一つとして単一の国家が解決し得る課題ではなく、その意味からも国際協調はますます必要なこととなってきている。国や民族・文化などが異なっても、その違いをこえて人間として世界を一つに結び、平和な世界を築くという人類共通の目的に向かって努力することが望まれる所以である。このような協力的態度を育成することは国際理解教育が果たすべき重要な課題である。

以上、網走大会研究紀要より転載させていただきました。

第11回北海道国際理解教育研究大会

大会に先立ち前日の11月1日(木)網走セントラルホテルで交流懇親会が開かれました。網走教育局の小川純一局長の祝辞をいただいた後、祝宴となり事務局からは福島清治副会長が出席され懇親を深められました。

2日目は前日の快晴とは、うって変わり生憎の時雨模様となりましたが、総勢450名の参加者は、市内3か所の会場校での参観後、開会式・講演会会場である網走セントラルホテルへと移動しました。

午後は下記の3つの分科会において熱心に討議がされました。

第1分科会

『小・中学校における国際理解教育をどうすすめるか』

第2分科会

『高等学校における国際理解教育をどうすすめるか』

第3分科会

『地域における国際理解教育をどうすすめるか』

午後2時30分から全体会場でNHK報道局国際情報記者(前ニュースセンター9時ニュースキャスター)平野 次郎氏の講演が始まりました。「網走で国際化を考える」を演題にユーモアをまじえ、予定時間いっぱい話されました。同氏は講演の中で、初めてパスポートを手にしたアメリカ留学は外貨制限があったこと、時代の移り変わりとともに渡航できない国に変遷が



国際理解教育を研究
【網走】児童、生徒の国際理解教育の在り方について



【網走】児童、生徒の国際理解教育の在り方について
考えた第11回北海道国際理解教育研究大会網走大会が、二の両日、網走市内のホテルなどを会場に開かれた。写真1。
同大会は、道内の小、中、高校教諭、市町村の国際交流担当者などをつくる北海道国際理解教育研究協議会(職員登会長)の主催。全道から約四百人が出席した。
一日は懇親会などが開かれ、二日の開会式では主催者を代表し福島清治・同協議会副会長が「今、地域を巻き込んだ国際化教育が求められている」とあいさつ。午後からは「小、中学校における国際理解教育をどうすすめるか」「小、中学校の国際化時代を迎えて教師が

(北海道新聞全道版より)

あったことなどわかり易く話されました。また今回の湾岸危機の際、イラク入国をめぐるのエピソードも披露され、聴衆を魅了しました。

会場は研究会参加者に限らず広く市民への働きかけがなされ、座席がないほどの盛況でした。

講演会終了後、引続き閉会式が行われ、第12回北海道国際理解教育研究大会は十勝で行われることが決定され、散会となりました。

果たすべき役割などについて、さまざまな意見を出し合った。

『咲きほこるブーゲンビリア。 でもちよっぴりさびしそう……。』

サウジアラビア王国ジッダ日本人学校長
藤本 伸治

こちらは、相変わらずの暑さでブーゲンビリアやハイビスカスが咲きほこっています。すでに国内の報道機関を通じて色々な情報が入っているので中東情勢については、私たちより詳しいのではないのでしょうか。

こちらの個人的な情報源はCBSnews、CNNnews、SAUDI news、などのテレビ番組、FAXで送られてくるB4版の共同通信ニュース、ドライバーからARABUの新聞報道の内容を聞く程度です。

8月28日に帰任し、直ちに二学期以降の学校再開の協議に入り、当面管理職は残留・一般教員のみ緊急一時帰国とし、9月1日の始業日を迎えましたが、すでに多くの家族は8月の8日から一週間ほどで国内の商社・企業の帰国命令に従って早々に帰国しました。当時の様子を聞きますとジャパン・パニックで、そのことが他国企業は勿論のこと日本企業に働くローカルの人には異常に写り、サウジ政府からも忠告を受けたとのことでした。

このようなことは、政府も国民も終戦後初めての経験ですから浮き足だすのもわからない訳でもないのですが避難勧奨が出ていない状況の中では時期早尚の感がないでもありません。かく言う小生も文部省の指示で家内は国内待機で、本人のみサウジ帰任です。

ともあれ二学期の始業式は2名の生徒と4名の教師で、こじんまりと言うより寂しく行いました。(本来なら45名の生徒と9名の派遣教員6名の時間講師)

しかし、ご承知のように中東情勢が一触即発の事態にあり多くの企業が撤退し児童・生徒及び教員も一時帰国国内待機をして情勢の安定を待っています。(現時点では管理職のみ)

その時期が来るまで単身赴任でジッダ日本人学校を閉鎖することなく学校管理に万全を尽くし、いつ子ども達が帰って来てもいいように現地に残留しています。(今2年生の領事館職員子弟が1名学校に通っています。)

ジッダ市内は、いたって平靜ですが、その静けさがかえって不気味な緊張感を添わせています。コンパウンド内にも心なしか他国籍軍関係者が増えたような気がします。

先月末、突然のようにサウジアラビア政府がジッダで生計を営んでいるイエメン人に国外退去命令を出しました。

今まで友好国国民としてサウジ政府の保護のもとにイカマ(IDカード)の所持義務免除・国立病院医療費免除などの優遇措置を受けながらサウジ経済を支えてきた人達には、寝耳に水の仕打ちでしたでしょう。一ヶ月という短い猶予期間では、身分を保障するスポンサーを見つけイカマを取得することなど非常に困難な事で、イエメンに帰国する人にはTAXをかけないとはいうものの帰国のための交通手段や経費のこと、帰国しても仕事が無いなどどれを取っても大変なことで俗にいう「イエメンパニック」が起きるのもうなずけるのです。

本校には5名のイエメン人ドライバーがいましたが、そのうち4名が爆国しますので、その善後策に頭を悩ましています。本当に大打撃です。当りどころのない空しさをひしひしと感じます。

それもこれも電撃的なイラクのクエート侵攻に端を発し、東欧の急速な民主化と国際的協調社会が漸く息吹いてきた束の間の平和が瞬間のうちに吹き飛ばした暴挙が、世界の軍事バランス・経済バランスを揺り動かしたことに起因している事は明らかです。

しかし、この紛争の当時国、対峙しているイラクと多国籍軍、それを見守る世界諸国が色々な思惑を秘めて、遅々として進展しない中東情勢にいらだちを見せていることが以前にも増して危機感が増幅しています。

また、中東向けラジオ・JAPANや海外共同通信ニュースにも中曽根元首相のイラク訪問による平和的解決のアクションが報道されたり、自衛隊の海外派遣をおもわせる国連平和協力法案が浮き沈みしているようですが、今こそ日本が国際社会の一員として何を成すべきか真剣に考え、行動すべき時が来ていますし、そのことができなければ「世界の孤児日本」になるのではないかと危惧しているのですが……。

何はともあれ、「中東戦火Xマス前か」、「Xデー間近か」、「ナイト・キャメル（夜隠攻撃）」、「新月の夜が危ない」等ということが現実にならないことを願い、在ジッダ総領事館をはじめ関係機関との連携を密にしながら事にあたり、健康にも充分留意して職責を果たすつもりです

以下に示しました学校通信は、思いもかけない中東紛争の煽りを受けて国内で体験入学している子どもたちとお父さん方が短期出張・単身赴任で留守がちな家庭を守るお母さん方にあてた特集号です。

何んの変哲もないこの一枚の学校通信が、今では学校と父母・先生と子どもたちの心をつなぐかけ橋になっています。また今まで目にも見えなかった、からだでも感じる事がなかった「平和」の2文字の大切さを焼き付けてくれたことでしょう心のフィルムに……

先ずは無音を謝し、近況報告まで

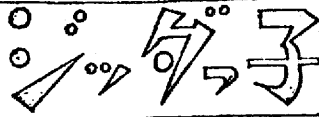
1990. 11. 5

S.A.I.S. JAPANESE SECTION
JEDDAH JAPANESE SCHOOL

P.O.Box 1235 - Jeddah 21431
Saudi Arabia
Tel.: 660-9805, Fax. 660-0263



المدرسة العالمية - القسم الياباني
المدرسة اليابانية مدرسة بجدة
ص. ب. ١٢٣٥ ج. ٢١٤٣١
تليفون ٦٦٠٩٨٠٥ فاكس ٦٦٠٠٢٦٣



校長先生より



さきほとるブーゲンビリア でも ちよとさびしそつ



〈 児童・生徒のみなさんへ 〉

その後 お変りありませんが、夏休みをすぎても、早や2ヶ月目をむかえようとしています。夏休みにみなさんに会えなかった日を加えると、約3ヶ月も顔を見ないこととなります。

- ・ 元気にグラウンドを駆けまわっていた。
 - ・ 鉄棒があまり上手にできなく、涙をおとしそうだった子。
 - ・ 毎朝元気よく「校長先生 おはようございます」と声をかけてくれた子。
- そんな明るい顔を見たり、元気な声を聞くことができずさびしいです。
みんながいつも登校時に入ってくる裏玄関のドアが無性に重く、横にあるブーゲンビリアも心なしかさみしく感じます。

でも そんな毎日の学校生活ですが、ただ一人、長嶺のぶよし君が、学校の児童・生徒の代表のように、元気に朝のあいさつをしてくれます。勉強は午前中ですが、全部の教科を学習しています。時には校長室や家庭科室でも勉強することがありますが、日本にいるみなさんに負けないようにがんばっています。

みなさんも、日本での学校生活が初めはなかなかなじめず、大変だったでしょうね。勉強はおくれていないだろうか、なまはすれにされないだろうか、友だちができるだろうか、など、心配したことが多かったと思います。

でも、だっじょうぶです。みなさんは「やさしく、きびしく、たくましく」の学校の校訓に書かれているように、すばらしい力を持ちまはかりです。自信をもって、毎日の学習に、生活に全力をつくしてください。またジッダにいる時よりも不自由なことが多々ありますが、ジッダにいる時よりも、お父さん、お母さんの手伝いをしてください。こんな時こそ、家族が助け合って、明るく楽しい毎日を作る努力をしてください。みんなが帰ってくる日を、首を長くして待っています。

〈 お母様方へ 〉

今、ジッダには単身帰任や出張ベースでの皆さんのお父さん方や、日本からの出張の方など、100名近くいらっしゃいます。その方々が時折学校にお見えになって、日本での家族の生活の様子を知らせてくださいます。

- 「せまい社宅で寝るのも大変ですよ」
- 「衣類が夏物だけ、冬物を買そろえなければならぬし……」
- 「冷蔵庫が小さくて、新しく買ったんですよ」
- 「息子は駅まで自転車で10分、電車で15分、そして徒歩で5分程の学校に通っています。これも子どもにとって人生経験の一つと思っています」
- 「教科書がなかなか手に入らず、時間がかかりました」
- 「同じ会社の人や、子どもたちにお客の洋服をとどけてくれました。ジッダにはたくさんあるのに……」
- 「セーフウェー・インターがなつかしい」
- 「子どもの方がたくましいですね」等

日常生活や学校の様子が、手にとるよりにわかり、大変助かります。

- それに反して中東情勢は
 - ・ ガルフの軍事緊張
 - ・ サウジ政府のイエメン制裁
 - ・ イスラエルとパレスチナの対立
 - ・ ソ連・フランスの仲介への期待
 - ・ ナイト・キヤメルの攻撃か?
- と先行き全く不透明ですが、学校は開校という最悪の事態を招くことのないように、日本人会、運営委員会、領事館との緊密な連絡調整としながらがんばっていますので、ご休むにございませう。どうぞご家族の心身の健康管理と、ご自身の健康に充分留意され、早々の帰ジッダを願っています。

尚、御住人様方は、いろいろ苦勞もおありのようですが、すこぶる元気で過ごしておられることをお伝えさせて筆をおきます。

平成2年10月16日 ふじとしんじ

湾岸危機

今回のイラクのクウェイト侵攻は、海外の日本人学校にも多大の影響を与えていることは、ジッダの藤本先生のおたよりや現在、日本に帰国し待機中のこどもたちへの「学校だより」からひしひしと伺い知ることができます。

12月12日の人質の帰国とひとつの段階は経りましたが、根本的な解決にはなっておりません。平和的解決の糸口も見え始めてきていますので、何としても軍事衝突を避け、中近東地区の日本人学校・補習校にこどもたちの歓声が沸上がることを願わずにはられません。

11月6日現在の湾岸地域の状況

学校名	職員数	児童数
ドバイ	管理職2名	3名
リヤド	校長 教員3名	10名
ジッダ	校長 教頭	1名
アブダビ	校長 教頭	0
ドーハ	校長 教員2名	0
クウェイト・バグダッド・バイルート休校中		

*湾岸地域で開校中の学校も左記のように大変な状況です。また、国内で待機している教員も「自分の机（持ち場がない）」がない現籍校での勤務の苦勞は大変と思います。

第6回札幌国際理解教育研究会

～国際性豊かな子どもをめざす、姉妹校交流の進め方～

1990年10月25日（木）札幌市立豊園小学校を会場に行われました。豊園小学校とアメリカ・アラスカ州のウェラー校・北海道インターナショナルスクールとの交流学習が展開されました。研究紀要にまとめられておりますので、姉妹校交流の実践に取り組んでいる学校、あるいは取り組もうとする学校にとっては、大きな指針となることと思います。

1次公開＜体育＞ 「パラシュートであそぼう」

指導者	広瀬 保志教諭	1年1組2組児童	61名
	石山由美子教諭	ウェラー校児童	2名
通訳	水島 誠治教諭	インターナショナル校児童	13名

2次公開<理科> 「あきをさがそう」

指導者・児童は1次公開と同じ

*授業後のこどもたちの感想

☆せんせいあのね、きのうはインターナショナルのおともだちと、パラシュートやじゃんけんジェンカやおめんとかつくってたのしくてたのしくてたまらなかったです。 たなか くみこ

☆ブライアンがきゅうしょくを「いただきます」をしていないのに、ごはんをたべました。きゅうしょくのなかで、おさかながきらいだったのがわかりました。 かきざき けいじ

☆しょうかいのとき、ショウとおんなの子のこと けっこんしきみたいたった。そして、パラシュートのときもたのしかった。そして、マスクをつくったときも たのしかった。そして、きゅうしょくもおいしかった。そして、もういちど いけるとおもいます。 マヤ マンスカニ

☆「また いきたい」 きゅうしょくがおいしかったので、おかわりした。おともだちができた。また、いきたい。 ブライアン

事務局より

1. 平成2年度までの会費納入について

未納になっている会員には振替用紙を同封しております。年額3000円ですので金額をご記入の上、納入方よろしく願いたします。

次号17号には、各支部の事務局長あるいは会長宛てへ各支部の納入状況一覧をお送りいたしますので各支部からの働きかけも合わせてよろしく願いたします。

2. 次号17号は2月下旬の予定です。

次号には平成3年度の派遣者名や派遣教員激励会の開催要項をお知らせできることと思います。

良いお年をお迎えください。